

う余り、ここ数年、国際協力事業団や文部省他にも伺いを立てているものの反応がないのが実状である。担当者にすると先方国から要請も出ないので、君は一体どういう資格で交渉を望むのかということになるらしい。武漢の標本館の窮状を訴え、一刻も早く再建せねばという私の心配・切望を訴え、良い知恵があれば、御教示を得たいというのが、この一文の目的である。武漢水生生物研究所の楽佩琦さんの資料並びに三浦泰蔵君の翻訳の一部を参考につかわせていただいた。

(加福竹一郎 Takeichiro Kafuku)

魚類学雑誌
40(3): 400-403, 1993

稚魚研究会の紹介

Group for the Studies of Early Life Stages of Fishes

稚魚研究会は魚卵や仔稚魚の分類や生態に関する情報の交換を主な目的とした研究会である。本会は1979年に若狭湾・日本海中西部の魚卵仔稚魚研究者が中心となって、魚卵・仔稚魚の分類同定に関する情報交換を目的として“卵稚仔浮遊生物研究会”という名称で結成された。その後全国各地の魚卵仔稚魚研究者も会員として参加し、また、内容も魚卵仔稚魚の分布や成長、食性、生残などの生態学的な情報が多くなり現在に至っている。会の名称も1986年に現在の名称に変更された。現在の会員数は約130名で、全国の大学や水産研究所、水産試験場はもとより民間調査会社の研究者も多く参画している。本研究会の活動は年1回の例会（研究発表会）の

開催を主体にして、研究発表の講演要旨集（“稚魚研究会報告”）の発行、および本年から魚卵仔稚魚の分類や生態に関する文献目録と会員の近況報告からなる“稚魚研究会通信”的の発行である。

1993年の例会（第15回稚魚研究会）は10月19、20日に九州大学で開催され、次の研究発表があった。1) 四万十川におけるヘダイ亜科仔稚魚の出現と食性、2) 垂直護岸に出現した仔稚魚のサイズ特性、3) フサカサゴ科（メバル亜科を除く）仔稚魚の分類・同定の現状と問題点、4) アカスジモエビの初期幼生の形態変化について、5) 富山湾におけるホタルイカ卵及び仔稚の分布、6) 能登島周辺海域に出現する異体類仔魚、7) 分離浮性卵のサイズ・比重・浮上速度、8) 数種の魚類のふ化後の成長にともなう消化酵素活性の変化、9) 沖縄県中城湾産トカゲハゼの卵と仔魚、10) 由良川河口域周辺におけるスズキ仔稚魚の出現、11) アオサハギの卵と前期仔魚、12) シラヌ型変態魚類の初期生活史戦略について、13) ソコイワシ（*Bathylagus ochoensis*）仔魚の形態的多形、14) 南極海域における稚魚研究の現状、15) アオギス仔稚魚に関するちょっとしたこと、16) ウミタナゴ胎仔の耳石微細構造の研究、17) クジメの孵化日と着底成功率との関係、18) ベラ科4種の浮遊期間、19) 耳石日周輪は仔稚魚の成長の履歴になるか、20) 人工飼育下におけるマダラ外部形態と内部形態の変化について、21) マガレイの着底期における胸鰭の消失と形成過程について。

なお、本会に対する問い合わせは〒517-07 三重県志摩郡志摩町和具私書箱11号 三重大学生物資源学部附属水産実験所 木村清志、電話05998-5-4604、ファックス05998-5-5492まで。

（木村清志 Seishi Kimura）

会記・Proceedings

魚類学雑誌
40(3): 400-403, 1993

1993年度第1回役員会

1993年5月11日（火）、於 東京水産大学資源育成学科会議室、出席者：岩井、沖山、上野、新井、谷内、松

浦、佐野、宮、河野、丸山、馬場、藤田。

- 前回議事録の確認。
- 報告事項 編集：40卷1号は5月25日に発行の予定。手持ち原稿45篇。会計：1993年度年会収支報告。国際魚類研究会議事処理委員会の解散に伴う事後処理を日本学会事務センターとの間で取り交わした。日本学術会議水産研連：8月27日に海洋生態系と生物資源をからめたシンポジウムを予定。

3. 1993年度年会の反省：今年度から編集委員会、評議員会の開催日の変更、サテライト研究集会の開催など新しい試みがなされたが、それに伴う支障は認められなかった。今後の課題として総会出席者が少ないといための対策、サテライト研究集会の企画募集やその開催時期、年会の地方での開催等について意見交換がなされた。
 4. 魚類学雑誌表紙の体裁の変更に関しては歐文誌、和文誌との関係も含めて編集委員会で検討し、原案を作成すること、年会の地方での開催については庶務・編集幹事で原案の作成をすることに決まった。
 5. その他。

会員異動 (1993.6.1-8.31)